

『西洋家作雛形』・『Cottage Building』比較研究 1

—明治初期日本における救貧行政からみる出版意図の再考察—

明治 建築仕様書 救貧行政
西洋家作雛形 Cottage Building 銀座大火

正会員 ○ 本橋仁 *1
同 中谷礼仁 *2
同 丸茂友里 *3
同 根来美和 *4
同 廣瀬翔太郎 *5

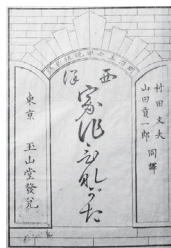
本研究は『西洋家作雛形』(1972)とその底本である『Cottage Building』(1970)との比較・分析を通して、西洋建築の技術導入期において、同書が果たした役割に関し、考察を行うものである。2012年度より早稲田大学中谷礼仁研究室にて、その読解を進めてきた。本発表は、その第一回目の報告にあたる。本年度は、その成果報告、四題を行なうものである。

1. 研究目的

『西洋家作雛形』の原書特定に至った菊池重郎氏は、同書と『Cottage Building』の目的との間に大きな隔たりがあり、明治初期の日本において紹介すべき書籍としての選択が「必ずしも適切であったとは云えない」¹と評している。しかし、本稿では、この評に対し、翻訳が行われていた当時の時局の変質という観点から再検討を行いたい。

2. 『西洋家作雛形』概要

『西洋家作雛形』は明治5(1872)年、村田文夫・山田貢一郎による翻訳本として出版された。佐藤功一(1878-1941)が『西洋家作雛形解題』において、「日本において最も古く出版された建築構造の書物」²として、その紹介を後に行っている。建築書としての側面のみならず、言語研究の分野において、翻訳に関して「かなり適切な訳語が当てられている」³とも指摘されてきた。確認しうる公刊本に関して、その種類と特徴をまとめたものが図1である。奥付を参照すると、明治5(1872)年玉山堂によって出版されたものが初版と判断できる(B)。千鐘房蔵版は、発行年記述の有無によって、発行者の表記に「須原屋茂兵衛」と「鈴木荘太郎」の相違が確認できる。千鐘房蔵版については、明治37(1904)年9月に須原屋茂兵衛は一度須原屋ののれんを下ろしたが、鈴木荘太郎がそれを譲り受けたという経緯がある。Dは丁度この頃と時期を同じくする。つまり、奥付に発行年の無いC(およびEの原本)の方がDより古い刊本と判断できる。 Fig.1『西洋家作雛形』中扉



表題：西洋家作雛形 訳者：村田文夫/山田貢一郎 出版年：1870 体裁：230mm × 155mm
本版：170mm × 240mm 頁数：4冊組、計123丁

表紙	A 玉山堂蔵版		B 千鐘房蔵版		C 千鐘房蔵版	D 千鐘房蔵版	E
	西洋家作ひなかつ	西洋家作ひなかつ	増補 西洋家作ひなかつ	増補 西洋家作ひなかつ			
内容	西洋家作ひなかつ	西洋家作ひなかつ	増補 西洋家作雛形	増補 西洋家作雛形	増補 西洋家作雛形	増補 西洋家作雛形	増補 西洋家作雛形
訳者名	村田文夫・山田貢一郎	村田文夫・山田貢一郎	村田文夫・山田貢一郎	村田文夫・山田貢一郎	村田文夫・山田貢一郎	村田文夫・山田貢一郎	村田文夫・山田貢一郎
発行年	明治五年壬申晩秋新編	明治五年壬申晩秋新編	明治五年壬申晩秋新編	明治五年壬申晩秋新編	明治五年壬申晩秋新編	明治五年壬申晩秋新編	明治五年壬申晩秋新編
発行所	東京 玉山堂発兌	東京 玉山堂発兌	東京書肆 千鐘房蔵	東京書肆 千鐘房蔵	東京書肆 千鐘房蔵	東京書肆 千鐘房蔵	東京書肆 千鐘房蔵
奥付	日本橋通二丁目	日本橋通二丁目	東京書肆 北畠千鐘房	東京書肆 北畠千鐘房	須原屋茂兵衛	須原屋茂兵衛	須原屋茂兵衛
体裁	和綴じ4冊本	和綴じ4冊本	和綴じ4冊本	和綴じ4冊本	和綴じ4冊本	和綴じ4冊本	和綴じ4冊本
その他	国立国会図書館蔵本	家蔵本	早稲田所蔵	早稲田所蔵	明治後期の再版	明治文化全集収録本	石井研堂校訂による復刻

Fig.2『西洋家作雛形』刊本一覧

成立背景 訳者の村田は、序文において、東京における火災の要因を挙げ、さらに直近の大火として「壬申仲春の災」、すなわち明治5(1872)年2月、和田倉門より出火した「銀座の大火」に関して記している。そしてある英国人より目下の建設事業の一助となるのみならず、都会から離れた土地での防火対策に繋がる点でこの書物は優れているといわれ、翻訳を行ったと述べている。ここで、既往研究において議論される点として、その翻訳の期間の短さが挙げられる。序文の通り、銀座の大火を契機として翻訳されたと考えれば、大火と同年に出版がなされていることとなる⁴。ここで、序文中、以下の一文に着目したい。「官之ヲ憫ンテ救恤ノ典ヲ舉行ヒ且後災ヲ慮カリ大ニ家室ノ制ヲ變革シーニ洋式ニ效フソレ洋人ノ家室ヲ築造スル」⁵。これは、後の銀座煉瓦街を予期させる一文であると同時に、ここで取り上げられている「救恤ノ典」という言葉の存在に着目し、その考察を後述する。

翻訳者村田文夫・山田貢一郎 村田文夫は天保7(1836)年に芸州藩に生まれた。本書翻訳に大きく影響があると考えられることには、①青年期に漢学、蘭学⁶を学んだこと②幕末英国に出奔⁷し『西洋聞見録』(明2)⁸を記したこと③明治4年8月、工部省の文書局訳文方に任命⁹されたことがあげられる。その他翻訳本には『子供育草』(明6)¹⁰、『英國律法要訣』¹¹、『輿地新図』(明7)¹²などがある。山田貢一郎(生没年不明)は、明治2(1869)年6月に村田文夫の下で英学教授を勤めたことが知られているが、詳細は不明である。

Fig.3.『Cottage Building』書影



3. 底本『Cottage Building』

『西洋家作雛形』の底本である『Cottage Building 第6版』(1870)について述べる。イギリスの建築家C・Bruce・Allenによる、労働者階級の住宅改善策を論じた書籍で、1849年の初版以来、1906年に至るまで13版を重ね数回の増補が行なわれた。

表題：Cottage Building (6th ed.) 副題：Hints For Improved Dwellings For The Labouring Classes 著者：C.Bruce Allen 出版社/出版年：London: Strahan & Co., 1870, (1st ed. London: John Weale, 1849) 体裁：190mm × 109mm

成立背景 初版が出版された1850年当時のイギリスは、産業革命による都市部の人口爆発、住宅不足が深刻な社会問題となっていた。特に貧しい労働従事者の住宅においては、その圧倒的な住居不足もさることながら、特に衛生・治安の問題が指摘され始めた。副題「Hints for Improving the Dwellings of the Labouring Classes」からも、本書が当時の貧しい労働階級の住宅状況に留意した内容であることが明らかである。その後第5版(1866)において、改善策が追加されるなど大きな改編がなされ

た。その序文には「農業労働者や彼の妻、そして家族に100ポンドで快適な住居を提供するひとつのモデル」について追加したとある。版を重ねる毎に副題が変更された点も考慮すると、住宅改善状況の変化に伴い、本書の対象労働者階級も次第に変化していった背景が伺える。

4. 『西洋家作雛形』における未訳出箇所について

既往研究でも指摘されているが、『Cottage Building』中、Chapter 1 (以下 Ch.1) の全文から Ch.2 Sec.1 にかけて西洋家作雛形に翻訳されていない。Ch.1 は主に、英国の住宅政策について述べられた箇所である。また、Ch.2 Sec.1 は、ロンドンの景観に関する内容が書かれている。訳出が開始される Sec.2 においては、下水道の形状など技術的な内容が報告されている。おおむね、当時の英国に関する社会的背景に関する記述については、未訳出とされ、あくまで訳出されている箇所は日本においても適用可能な技術的箇所に絞られているといえる。

考察 翻訳書『西洋家作雛形』(明治5年)の諸背景

銀座の大火 明治期以前より火災に困窮していた東京において、明治5(1872)年の銀座の大火が、不燃性建築物という局面を浮上させたのは必然であった。当時工部省工部大丞であった佐野常民¹³は、工部省御雇い外人の技術者たちに、東京の罹災地の再建を如何にするべきかの意見を求めていた¹⁴。さらに、銀座大火は焼失区域が相当な広域にわたった為、罹災者救護が急を要した。木挽町から築地にかけては当時貧困者の集団地区があり¹⁵、相当数の貧窮者が発生し大蔵省¹⁶は火災の救恤を目的に募金を集めた。募金の一部は急速に罹災貧困者に支給された¹⁷。

救貧法成立へ向けて こうした救貧行政は、大火以前から全国的に展開がされ始めていた。災害困窮者の他、幕末期から明治初頭にかけて、商業資本の流通、海外資本主義国の来朝などにより¹⁸農村は荒廃し多くの困窮者が生じていた。明治4年の廃藩置県を経て11月4日の太政官布告により、土木等と並んで救恤の一切の決定権を国家の政治体制の元に掌握する旨が記される。政府のみならず、『東京日々新聞』同5年3月8日43に「済貧窮ノ説」と題した論説が掲載されるなど、貧困層の救済に関する意識は社会に広く存在したと考えられる¹⁹。

翻訳書『西洋家作雛形』(明治5年)の時局性

ここで改めて、村田の執筆時期について再検討を行なう。前述のように、翻訳者村田は、明治4年に工部省の文書局訳文方に就任する。さらに、東京日日新聞にて、明治6年3月4日から7日にかけて本書の広告が掲載される。これまで、『西洋家作雛形』は、これまで西洋建築の技術導入という側面でしかみてこられなかった。しかし、この広告には、本書の読者対象として「田夫野人」、つまり貴賤を問わぬ人々に向けられ、その目的に「健康永壽」が掲げられていることが分かる²⁰。

既往研究において、菊池氏が述べたように、技術導入の過程においては、『Cottage Building』を選択したことが適切ではなかったとされてきた。その一方で、本書の翻訳開始時には、すでに耐火とともに貧民層の救済に対する社会的関心は高いものであった。上述のように、同時代的な視野において本書を再考すると、本書の啓蒙的側面が浮かび上がる。救貧行政の側面も持つ意図をもった翻訳であるとするならば、むしろ、底本『Cottage Building』は、積極的な態度のもとに選択されたとも考えうる。

結論 訳本『西洋家作雛形』・底本『Cottage Building』の概要と背景についてまとめ、本書が翻訳される背景に関して、明治初期の日本における救貧行政の側面を加味した上で、翻訳の背景について再考察をおこなった。その意味で同書の翻訳は、時宜性を考えると、銀座大火より準備されていたことも、十分に検討されてよいであろう。²¹

1. 菊池重郎「明治西洋建築術『西洋家作ひながた』」第2報・その刊行の意図と原著との関係について、『日本建築学会研究報告(3132)』(日本建築学会,1955,pp.235-236) 2. 佐藤功一「西洋家作雛形解題」,吉野作造編『明治文化全集 第24巻,科学編』(日本評論社,1930,pp.7-14) 3. 藤田治彦「明治5年刊『西洋家作雛形』の建築用語」,『待兼山論叢 33号,美学篇』(大阪大学大学院文学研究科1999,pp.1-24) 4. 藤田治彦「明治5年刊『西洋家作雛形』の建築用語」,『待兼山論叢 33号,美学篇』(大阪大学大学院文学研究科1999,p.21) 5. 本書序一ウラ 6. 緒方洪庵の門下。同じ頃、福沢諭吉なども同門であった。 7. グラバーの韓姫より、国禁を犯して1年半ほど滞在した。 8. 『西洋問見録』、井筒屋勝次郎出版(1869) 9. 七等出仕、その後工部省内では測量正(明7)等を務めた。同10年には官を辞して團圓社を設立、ジャーナリストとして成功を収めた。 10. 『子供育草』、注彫楼(1873) 11. 『英園律法要訣』(1875) 12. 『興地新図』、稲田佐兵衛等出版(1894) 13. 佐野常民(さの つねたみ 1823-1902) 14. 工部省測量司マコベーンなど。 15. 彼らのなかには、築地周辺にいて外国人居留地の設置によって、やっとの思いで立ち退き移転して住みついていた。 16. 大蔵省の浪沢栄一と東京府の井上馨がほぼ同時に太政官に提出している。 17. 当時の13,334円、一人平均89銭ほどが支給された。 18. ささまざまな要因が考えられる。 19. 民間で初期のものとしては福沢諭吉の『西洋事情』などにもその意識が見られる。 20. 『東京日日新聞』の明治6年3月4日から3月7日まで4日間こたり、広告が出されている。 21. 池上重康「明治初期日本政府蒐集船載建築書の研究」において、原著が大蔵省の蔵書であったことが明らかにされている。しかし、村田は工部省にいたが、大蔵省に翻訳局ができたのは銀座大火後であり、それ以前から翻訳しはじめていた可能性をより強くする。

Fig4. 東京日日新聞

『Cottage Building』	『西洋家作雛形』
<ul style="list-style-type: none"> ・ Preface ・ Chapter I. 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 西洋家作雛形序(明治五年, 村田文夫)(序1-2丁) ・ 凡例(明治五年, 訳者)(序3丁) ・ 西洋家作雛形目次(目録4-5丁)
<ul style="list-style-type: none"> ・ Chapter II. <ul style="list-style-type: none"> Section I. - Site and Position (pp.21-23) Section II. - Drainage, and Supply of Water (pp.23-30) Section III. - Walls (pp.30-39) Section IV. - Floors (pp.40-44) Section V. - Roofs (pp.45-48) Section VI. - Ventilation and Warming (pp.48-54) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 巻之一 <ul style="list-style-type: none"> 第一編 場所并尔位置の事(1-2丁) 第二編 水利并尔給水の事(2-14丁) 第三編 壁塼の事(14-29丁) ・ 巻之二 <ul style="list-style-type: none"> 第四編 床の事(1-8丁) 第五編 屋根の事(8-13丁) 第六編 風入并尔温氣の事(13-23丁)
<ul style="list-style-type: none"> ・ Chapter III. <ul style="list-style-type: none"> Remarks on a Single-floor Double Cottage (pp.55-59) Plates I. to XXXVI.—Plans, Elevations, Sections, &c. (pp.60-94) Estimate of Cost (p.95) Specification of Works to be done in the erection of Cottages (pp.96-102) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 巻之三 <ul style="list-style-type: none"> 第七編 一階二軒造の小屋の事(23-28丁) 第八編 家宅の平面、前面断面の圖解(1-22丁) 第九編 建築入費の事(22-23丁) 第十編 建築諸職人の分課(23-34丁)
<ul style="list-style-type: none"> ・ Appendix: <ul style="list-style-type: none"> Plan for a Labour's Cottage, with Illustrations (pp.103-105) Specification (pp.106-108) Economy of Rural Dwellings for Tradesmen and Persons of limited Incomes, with eleven Illustrations (pp.109-124) Descriptive Specification, with References to the letters on the Plan (pp.125-130) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 巻之四 <ul style="list-style-type: none"> 第十一編 ガルド子ル氏并尔ソソソ氏の職人尔備へ多る一家の造法(1-2丁) 第十二編 五室の家宅建築尔付諸職人の分課(3-6丁) 第十三編 田舎の家宅尔付き儉約法(6-28丁)

Fig5. 両文書の目次構成の比較

*1 早稲田大学理工学術院 助手

*2 早稲田大学理工学術院 教授 博士(工学)

*3 早稲田大学 修士(工学)

*4 早稲田大学 修士(工学)

*5 早稲田大学 学士(工学)

*1 Research Assoc, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ.

*2 Prof, Faculty of Sciences and Engineering, Waseda Univ., Dr. Eng.

*3 Waseda Univ., M. Eng.

*4 Waseda Univ., M. Eng.

*5 Waseda Univ.